

泣きつく場があるか、どうか。

近いからいそ

叩きつけた風呂のフタは、大きな音を立て、3つに割れた。この破片は、私の心、そのものではないか。

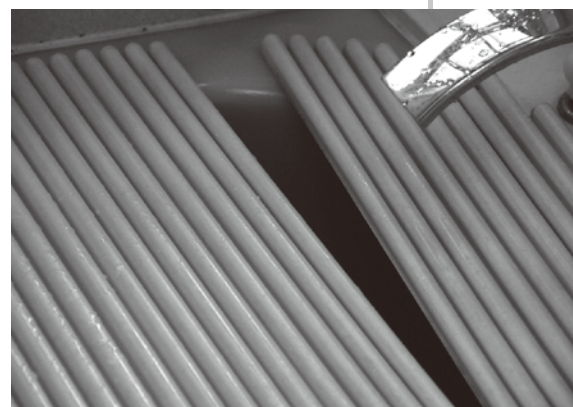
柴俊子さん（当時48・三郷明盛）は、自分の心と体が限界だということに、ようやく気が付いた。

俊子さんの家族は、夫、実母、看護師の長女、高校生の長男の5人。平成8年に実母が脳出血で倒れてからは、介護が俊子さんの生活の中心を占めるようになった。

母の食事介助や身の回りの世話のために病院へ通い、薬を飲ませ、目をつむったのを確かめてから帰宅する毎日。退院後、在宅介護になった母親は、2度目に倒れた時に視野狭窄を併発。目がほとんど見えなくなったパニックで、1日中、俊子さんの名前を呼び続けた。3度目の脳出血で母親の病状は一気に進み、左半身麻痺、物事の認知もできなくなってしまった。

自分を大事に育ててくれた母親だからこそ自分が守らなければという思いと、夫や子どもたちにはできるだけ

特集 「場」を求めて



心労が原因で、衝動的に投げつけた風呂のふた。介護中の足跡は今も自宅に残る。

日常生活での負担を掛けたくないという思いが交錯し、俊子さんは「つらい」、「助けて」ということを言えぬまま、母の介護を続けた。そして、その感情はある日、堰を切ったかのように一気にあふれ出す――。

退院した母親を風呂に入れようと準備をしていた時のこと、居間でテレビを見ながら「あはは」と笑う家族の声が聞こえてきた。

俊子さんは思わず、手にしていた風呂のフタを床に叩きつけた。これまで無意識のうちに押し込めてきた感情が、思いがけない行動となって現れたのだ。

俊子さんは自分のしたことに驚き、震えながら、その場に立ちつくした。

大きな音が付き、最初に長女が風呂場に駆けつけた。家族は皆、俊子さんのことをいつも気遣っていた。しかし、その精神が、もはや限界だということが、ここで初めて分かった。

*視野狭窄 視野が狭くなったり、部分的に見えなくなる症状。

母・智恵子さんは、71歳の入院から80歳までの9年間、13回の入退院を繰り返し4年前に他界。「自分の経験が誰かの役に立てるなら」と俊子さんは介護体験を克明に話してくれた。取材前、手を合わせる。

編み棒は、倒れる前の母が愛用していた大切な形見。「きつと家族のことを思いながら編んでいたと思います」と俊子さん。あたたかな日々を今も忘れぬ。

他人の一言

肉親だからこそ、言えない。無理をしてしまう。時として家族は、そんなもどかしさを抱える。

俊子さんはその後、ついに自らも体を壊して入院。そのことを機に、母親の施設入所を決めた。それは家族にとって、とてもつらい決断だった。

介護の負担が減った分だけ、愛情を掛けて通えばいいと自分に言い聞かせたが、自分の親を施設に預けたという罪悪感がいつも心を離れなかった。そして、母親の「今度はいつ来る」という言葉が、俊子さんの頭の中を何度もこだました。

そんなある日、思い詰める俊子さんの様子を人づてに聞いた施設の職員が、力になろうと自宅を訪ねてきた。その職員は、わざわざ家から遠く離れた所に車を止め、歩いてやってきた。それは、見慣れぬ車が目立ってはいけないうと、周りの目をさりげなく配慮したためだ。

俊子さんは、初対面のこの職員に不思議と心を開くことができた。胸に秘めたこれまでの思いを、さらけ出すことができた。そして、話をすべて聞き終えたその職員は、静かに口を開いた。

「柴さんの心には、長い、布団針が刺さっていたんだね」。その一言を聞いたとたん、俊子さんの胸のつかえは、すうっとなくなり、頭の中の霞が晴れていった。

――この人は、私のことを理解してくれている。自分が周りに言いにくいことに耳を傾け、理解してくれる人がいる。それは、とても心強いことだと感じた。

